

四種混合予防接種説明書

(1) 病気の説明

【ジフテリア】

ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。1981年(昭和56年)に現在使われているジフテリア・百日せき・破傷風混合ワクチン(DPT)が導入され、現在では患者発生数は年間0~1名程度です。しかし、ジフテリアは感染しても10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状が出ない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。感染は主にのどですが、鼻にも感染します。症状は、高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することもあります。発病2~3週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起すことがあるため注意が必要です。

【百日せき】

百日せき菌の飛沫感染で起こります。1948年(昭和23年)から百日せきワクチンの接種が始まって以来、患者数は減少してきています。百日せきは、普通の風邪のような症状で始まります。続いてせきがひどくなり、顔を真っ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹く様な音が出ます。熱は通常出ません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり、(チアノーゼ)けいれんが起きることがあります。肺炎や脳症などの重い合併症を起こします。乳児では命を落とすこともあります。

【破傷風】

破傷風菌はヒトからヒトへ感染するのではなく、土の中にいる菌が、傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、口が開かなくなったり、けいれんを起こしたり、死亡することもあります。患者の半数は本人や周りの人では気が付かない程度の刺し傷が原因です。

土中に菌がいるため、感染する機会は常にあります。また、お母さんが抵抗力(免疫)をもっていれば出産時に新生児が破傷風にかかるのを防ぐことができます。

【ポリオ】

ポリオ(急性灰白髄炎)は「小児マヒ」と呼ばれ、わが国でも1960年代前半まで流行を繰り返していました。予防接種の効果によりわが国では1980年(昭和55年)を最後に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者の発生はなくなりました。しかし、現在でもインド、パキスタン等で野生ポリオウイルスによるポリオの発生が見られ、これらの国々から飛び火したケースで再びポリオが発生し、さらに他国へ拡大する事態も生じています。したがって、これらの地域で日本人が野生ポリオに感染したり、日本に野生ポリオウイルスが入ってくる可能性も考慮しておく必要があります。

(2) 4種混合ワクチン

百日せき、ジフテリア、破傷風及びポリオ(急性灰白髄炎)に予防に効果があります。

1期の初回接種は、生後3か月以降から生後12月に達するまでの期間に3~8週間の間隔で3回、追加接種は初回接種終了後、12月から18月に達するまでの間に、6か月以上間隔をおいて1回行います。

確実に免疫をつけるためには、決められたとおりに接種を受けることが大切です。万一間隔があいてしまった場合には、市町村またはかかりつけ医に相談してください。

(3) 4種混合ワクチンの副反応

臨床試験において、生後3か月以上90か月未満の小児259例中235例[90.7%]に副反応が認められました。主な副反応としては、注射部位紅斑[69.1%]、注射部位硬結[52.1%]、発熱[46.7%]、注射部位腫脹[30.9%]等であり、これらの副反応のほとんどは接種後3日後までにみられました(承認時)。稀にショック、アナフィラキシー様症状や脳症等の重大な副反応が出る場合もありますので、接種後は観察を十分に行い、お子さんの機嫌が悪くなったり、気になる症状があるときには医師に相談してください。

(4) 予防接種健康被害

この接種は、予防接種法にもとづく定期接種です。定期予防接種による健康被害は、厚生労働大臣が当該予防接種と因果関係があると認定した場合に、給付を行う救済制度があります。